

臨床中毒学

相馬一玄 監修

上條吉人 執筆

＜書評者＞ 田勢長一郎（福島県立医科大学附属病院救急科部長）

中毒学は単なる医学の一分野ではなく、化学・薬理学の応用であり、緊急かつ適切で高度な医療を必要とする救急医学においても重要な位置を占めている。さらに、患者の内面性や社会的背景についての検討も避けては通れず、法医学や精神医学的なアプローチも求められる。すなわち、中毒学は基礎から臨床に至る総合的な学問であり、予防から根本的な治療を図るには多くの専門科の集学的な治療を必要とする。

上條博士は大学時代に化学に没頭し、さらに医学の道に進んだ後は、脳科学への関心から精神科医として研鑽を積んでいた。そして重症患者管理の必要性も痛感して救命への道を歩み出し、現在は救急医学の若手リーダーとして活躍している。本書では、臨床中毒学にはうってつけの、その豊富な知識・経験に裏打ちされた「筆者ならではの強み」を発揮している。

急性中毒患者の大多数は自傷行為や自殺企図なので、今までの「急性中毒治療の4大原則」だけでは

根本的な解決にならない。上條博士はこの4大原則に「精神科的評価と治療」を加えた「急性中毒治療の5大原則」を提唱している。今までの臨床中毒の成書では外面的な救急医療を主とし、精神科的な治療は別な視点で述べられていたが、本書では上條博士の精神保健指定医としての立場も加わっている。臨床中毒学の分野に新たな視点を提案した本書の意義は大きいであろう。

中毒のメカニズムの解説では、EBMにのっとりた図表を駆使するなど、上條博士の化学者としてのバックグラウンドが随所で垣間見られる。メカニズムに目を通せば発現すべき症状などが自然に浮かんでくるのも本書の特徴である。また、各所に症例提示があり、読者が中毒診療を行う上で非常に役立つ情報やヒントが満載されている。

本書では、特に「生物毒」の章に多くの写真が掲載されているが、これらを撮影しているときは、上條博士の心はつかの間、「生き物

中毒」だった少年時代に戻っていたのではないだろうか。さらに、急性中毒の原因となる毒・薬物鑑別のポイントでは、語呂合わせで記憶に残るような試みがなされている。語呂合わせは国試対策では常識的だが、日本での専門書ではまれである。しかし、語呂合わせで覚えた内容は、30年、40年たった今でも記憶に残っていることが多い。臨床中毒学の重要な部分は常に記憶にとどめ、将来的にも中毒学の面白さや重要性を読者に訴え、またそれを実践してもらうという、上條博士ならではのユニークなアイデアである。

各項目とも専門外の読者でも読みやすく、一方で専門書として深く掘り下げられているため読めば読むほど内容が濃く、誰しもが満足するであろう。中毒を専門とする医師以外にも、日常診療で中毒に接することのある医師、これから勉強する研修医など、多くの医師に自信を持って推薦できる書籍である。

●B5 頁576 2009年
定価10,500円
(本体10,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00882-2]
医学書院刊